



1000

NO. 986118

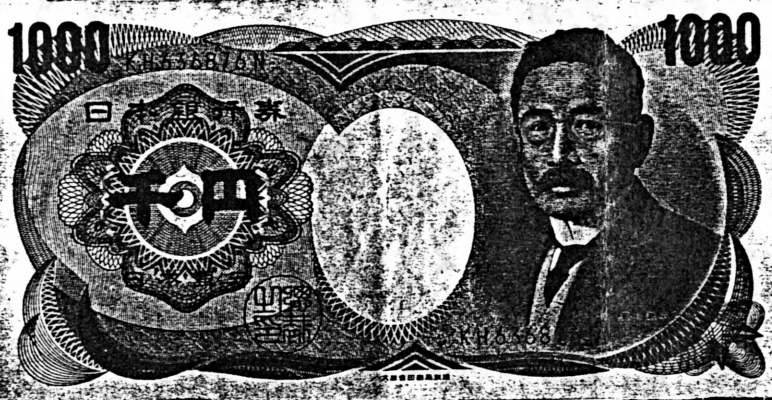
日本銀行券

千円

PERSONAL

EFFECTS

NO. 986118



1000

1000

千円

大蔵省印刷局製造



## 国体とは何か?

長い事、銀行のCMが気になっていた。どうして執拗に3倍を使うのか。もっと正確に言うと、家族のイメージの濫用はなぜなのか。

川上慶子フェアの時、これは危いぞ、と思った。ウータで昔売っていた月刊「ぼぼ」というマスコミ批評のミニコミに、彼女を死(タラス?)の中のエロスだ、などと書いていた。冗談だろう? それはそうかもしれないが、問題はその扱いに決定的に社会意識が欠如していることだ。報道写真を見てエロスだ思うのは勝手だけれども、それ時を公的なメディアが主張するのはやはり異常なことではなかったのだろうか。被害者の人格で、被害者の罪が裁量されるとでもいうのだろうか。

フェアにしろプライベートにしろ、ああしたスタイルの雑誌の出現は、とても必然的であったように思う。日本は視覚文化と言われる。それに、いかかわしい週刊誌の記事内容から比べれば、まだしも公正というものだ。画期的だったと僕は思う。ただ、それがなぜ既製の成のクラフ雑誌に似ず、女性週刊誌に近づいたのか、である。いや、週刊誌全体が女性(及び芸能)誌化している。

岡田有希子が自殺した時、その写真を掲載したのはまず報知新聞(スポーツ誌)、それからF・F誌、そして新聞・出版系の週刊誌、及び女性誌だった。だからこれをF・F誌のみの問題とするわけにはいかない。

僕はこれは、いうなればこの民族の汎家族主義に帰せられると思う。テキストコミュニケーションへの配慮に欠けるのだ。時代劇を見ていると驚くのとだけれども、天下の殿さまにも、町娘を隠れて手ごめにする密室も無い。

かねかね、「ロータ・コンプレックス」という名称に疑問を感じていた。アポコフ読解としても、心理学用語としても。正しくはオチコンプレックスとニフオマニマ(?-種の色情狂)の混成体であ

らう。そしてそれは政治的背景を必要とするだろう。

高校の時たしかトム・ウルフの本を読んでいて、同じ出版社に「ロータ・コンプレックス」という本があることを知って、そうした興味から一冊物してみたいと思ったが、最近手に入れることができた。その終章にミルトン・オクンなる博士のこんな言葉が引用されている。

「愛はすばらしい。快いものです。愛することはとても楽しい。しかし、生きることに絶対必要なものではないのです。愛がなくても、人は生きられるのです。食べ物のや水ではないのです。それがなくても存在しているのです。人間は、多くの人間は生まれ、それでも全くうまく生きていっているのです。」

この「愛」を「家族」と置き換えるならば、日本の国体「幻想」に対する処方箋として充分であるように思う。

おまけ

電通の企画LE、毎日新聞社と高野山大学主催の「マンタラ1990タイムーいままで密教なのかー」に行く(無料)。

密教に方法的興味を示すコリン・ウィルソン、中野美代子などに対して、高野山大関係者のファンタックな強弁が見苦しい。

このくま坊主どもとの対決で、政治感覚の鋭いを見せたのは河合隼雄と石川光男で、特に河合隼雄は、テーマがテーマだけに、全てが終ってみるとまるで彼の講演会であったかのような印象を残した。

会場の赤坂プリンスホテルの、たぶん一番安いレストランのウエイツスの口元な美貌(お嬢さんじゃない、ということ)を熱しむ。

帰りに、その丘で国鉄処分反対のデモをやっていて、思わすオーッと拳を上げようになった。

中矢

◆今月は波乱の月だった。

▼能楽堂で仕舞(能のほんの一部を抽出したもの)の初舞台を踏む。三越における薬師寺展のイベントで能・舞楽・文楽をただ鑑賞する。など古典芸能に親しむ今日この頃。特に文楽は人形と人形遣いとの関係が艶めかしく魅かれる。能も、眠たくなるのも多いが、(京では子供を叱るのに「いうこときかんと、お能見せませすえ〜」と脅しつけたという)スペクタクルなショーも多い。狂言は風刺・笑劇なのでなお面白い。茸の精に取りつかれた男が山伏に折伏を頼むが、逆にどんどん盲人間が増殖し飛びかかってゆく話とか、さまざまに盲人に酒をふるまい共に楽しんで男が、一度別れた後こっそり戻ってきて別人を装い盲人をなぶり突き倒して喜ぶ、という困った話もあるが、最近では新能のように開かれた催しも多いが、旧態依然・男尊女卑・家元主義の世界であることも事実、残念。

◆アウシュビッツの生き残り、シマンスキー氏の講演を聞いた後、(時間的に、表層的な話に終わる。山手教会での遺品展の方が「物を言って」いた)(そういえばエリ氏がノーベル平和賞を貰った。！次点はB・ゲルドフだって！エリ氏の厭世的ポーズはとてつとチャーミング。そういえば「厭世」の詩人が死んだっけ。彼の、中年にさしかかるにつれて大嫌いだった父の姿に自分が似てくることに気づくという恐ろしい話は忘れがたい)法政に風の旅団を観にゆく。八幡山公演よりずっといい。焼き直し、ワンパターンと片付けるのは簡単。だが、子役・しろうと芝居を許容し飽きさせぬ度量の大きさ、又そのシロウトが故山岡氏の細君であること、ラストシーンに燃える人型が法政大のビルをバックに落ちてゆくという韓国学生焼身投身事件にそっくりのシーン等あまりにも芝居が現実に現実が芝居に食い込んでいて、おいそれと批評できない気にさせる。芝居で「なぜ君達は、この死臭に気づかないのか」といっているテントの外では学生達が無関心に通り過ぎていっているわけで、私には彼等に対して「君達には火の鳥の美しさを見ることはできない」との優越の言葉を吐く資格はないが、テントをめくりあげるとそこには芝居の熱狂など知らぬげの学生らの姿が見えるという構図が、そこに機動隊がひしめいているという光景よりも怖ろしく、無力感をかきたたせるものであることはあるようで、そんな焦燥が芝居に色濃く影をおとしていたように思う。音楽は美しく、即興で芝居に音づけしてゆく試みも効果的。夏がくれば思い出す〜なんていう手あかにかみまれた陳腐な曲が美しくよみがえった。TVで夢の遊民社・ISCO Tを垣間見るが、これら演劇の世界にはまあまったく興味が持てぬ。

★「エル・トポ」幻のカルト・ムービー。メキシコ映画らしいドギツの宗教映画。不具者の群れが閉じ込められている洞窟の町に主人公は抜け穴を掘ってあげる。だがその善行、転じて災いとなり、喜び勇んで街になだれ込んだ異形の者達は、恐れをなしたフツの人人々に一人残らず虐殺されてしまう。嘆く主人公は傷心の焼身自殺。

(そういえば「神様の花嫁」事件があった。今度の仁王立ち倶楽部には江戸時代の宗教的自死、即身仏について書いたのだが、これなどは衆生済度という大義があったが……〔自らミイラ化を望むなど極度のナルシシズムとも言えようが〕。最近「死のう団事件」の本を読んだが、これなども一人のカリスマを崇める集団の自決だったが社会抗議の義があり当局の弾圧も激しかった。今回の教祖には「行ったことのない場所の風景が見える霊力があった」というが最近拾った「衝撃の神霊雑誌」の例はもっと凄い。星ツァーと称し皆で水・木・金星・北極星に行ったりするのだ。1フライト5万円、で外宇宙まで行けるなんて安いもんじゃあないか!?)

●下北沢ロフトで知人の結婚パーティー。シェ・シズ一曲目のインストルメンタル、切なく美しい。福本氏がおまんこ倶楽部と大声で連呼するにはまいった。(本当はるまんこ倶楽部です。日活ロマンポルノの) 武術の腕を見せたくてうずうずしている与太夫婦につっかかってゆき男にはアザになるほど腕を捻じきられ女には平手打ちを食わされる。か妙にすがしい。芝居の〔アンチ〕ヒーローになったよな昂揚感。これをきっかけに武術の達人になったらコメディ。

●「音なしの人たちG o ~」参加者6人が2人ずつ順にペアになり5分間即興。福本氏(ハウリング) + いむた氏(おどり)、はらい川氏(胡弓) + いむた氏(唄)、谷川氏(ピアノ踏み) + 荒井氏(Sax)等よかった。ラストは皆で狂燥。観客という邪魔者がいない、私にとっては一つの理想の形。同じ頃、高麗神社ではサムルノリが二千人を集めてぐわんばっていたらしいが。みるよりやるべし? ▲井の頭公園公演に初めてゆく、トシ氏の送別も兼ね。心地好い空間。終了後、露天の宴、コンロでお好み焼、なんと好ましい?

■荒井氏の個展におけるパフォーマンスは彼のピュアな感じの版面に囲まれた、コンクリートの床、通りに面した一面のガラスの空間が珍しく、演技内容(?) もそれにみあったものだったように思う。

※「Exercise of」コレハスゴイ。人の声? とは思えぬ、心酔い音の波々。フギャッの所では思わずウチの猫の無事を確かめてしまう。

〜ワープロ・マシン等マシンと仲よくなる。名前つけて可愛がる(3)。

☆公民館運動衫並場所の結果について。

参加者(ただし参加費支払済の人のみ): 中矢誠、大塚一弘、河合渉、鈴木宣人、小堺文雄、美川俊治、藤本和男、藤本成昌、桑原正彦、福本健修、乙部聖子、藤井景化、田中トシ、グリンパー、向井千恵、鈴木やよい、山田道嗣、長谷川洋と同行者(無記名)、桐原結子、被川裕、香村かをり、大熊直、パイロン・ブラックと同行者(無記名)、いわたこうじ、以上27名。

収入: 参加費合計13,500円 (@500円×27)

支出: 会場[音楽室及び録音室]使用料4,400円(9時から13時まで1,000円/時間及び200円/時間、13時から18時まで1,600円/時間及び300円/時間)、本来なら合計8,800円だが、西村氏の団体登録のお蔭で5割引)、ピアノ使用料200円、マリンバ使用料100円、チラシコピー代1,500円(@5円×300枚)で、合計6,200円

差引残高: 7,300円

累計残高: 12,300円

感想: 途中からやっばり時間が押してハラハラして心臓が悪い/今回は美川氏とデュオで演るつもりだったのに時間が無くなってしまい残念/受付のパパアの小役人の態度が腹立たしかった/パイロン・ブラックには笑った/etc.

忘れ物: 電線延長コード1本、標準プラグ⇔標準プラグのケーブルコード1本+標準→ミニのプラグアダプター1個。藤本が預かってますから、心当たりのある人(知っている人)はご連絡ください。なお、テープの忘れ物は持主が判明、行方不明になったローリーのトイピアノは後に見付かって良かったね。それから、残高が結構あるんで、次回は参加費タダでやっていいかも。

☆「メイド イン ジャポン」(ひさうちみちお)「福音書」の姉妹品のような作品集。/「ボーダー①」(麻礼&たなか亜希夫)「狩撫+たなか組とか狩撫+かわぐち組とか矢島+はやせ組とか矢島+弘兼組は皆クサイけど好きだ。/「実験電車」(姪子能取)5年で単行本14冊というのは順調なんだろうなやっばり。もっとも、最長編作でも34ページだもんな。/「身体という謎」・「生命のざわめき」(小阪修平 編「思考のレクチュールシリーズ」若手啓蒙派による哲学ダイジェスト。/「現代科学の術語集」(山口昌哉 監修)参考図書。/「憂愁の物理学」(林浩一)今年読んだ本のベスト。筆者(理論物理学者)の精神は柔らかに頭は堅い。/「プレイガイドジャーナル9月号」上落したとき買ったら、偶然インスタントラーメン特集号だった。この雑誌の広告で初めてハウスの「好きやねん」を知ってさっそく食う。たちまちファンになり、関西地区限定販売というので向こうの友人に送ってもらった。馬鹿ですね。/「ブルータス 特集: 裸の絶対温度」カメ毎のザ・ヌードとかは見逃してうちに発禁になってしまったので、これは買っておこうと、中も見ないで買ったら、なんてことはない。馬鹿でした。「美しいヌードなら許される」みたいな思想が匂う点は不快。/「Quark Special 保存版 セックス・サイエンス」相変わらず下ネタの好きな科学誌である(FOMNI)もからかった。/「アキラ 3」(大友克洋)中野孝次がこきおろしていた。「若い連中を理解するために」読んだんだそうだが、無理なモチベーションで読むことないだろう一つ。/「ニューロマンサー」(ウィリアム・ギブスン)噂のサイバーノックSF。確かに面白いが、未来はなさそう。現れるべくして現れたスタイル(NW+ハイテクノロジー+ハードボイルド)。映画化進行中とか。/「彩」(コンピレーション・カセット)・「キタカゼトタイヨ Vol.1」(カセット)どちらもまだ1度しか聴いていないが、可もなく不可もない出来。/「Hyperpris」(Holger Hiller)・「Where The Flies Are」(Danielle Dax) 最近の洋楽で、新作が出たからって聴く気が起きるっての

はせいぜいこの辺ぐらい。ヒラーは冷たくて気持ち良かった。ダックスはちょっと凡庸なポップになりつつある。/「Love Plays Such Funny Games」(TheMelody Four) ベレスフォード、コクスヒル、コウのトリオでスタンダード・ナンバーを演ってる趣味的な10インチ盤。「あなたと夜と音楽と」って感じのノリでノスタルチックができる。/「台風くらぶ」ソーマイ監督の作品は「セーラー服と機関銃」という悪作しか観たことなかったけど、賛否両論あるとかいう長回しは、今回の作品に関しては成功してるんじゃないかしら。中学生の世界をどこまでも中学生の目で描こうとする実験には共感できたけど、それならもっと不親切に描写してもいい。まだ説明しすぎという感じ。/「パタリアン」・「リア・アニメーター」京都の知人宅でビデオで観た。いずれもコミカルなホラーだが、後者のほうが断然面白い。異様に冷静にして無茶苦茶な主人公ハート君のマッド・サイエンティストぶりが良い。原作はラブリフトだっけ? /「めぞん一刻」・「ア・ホーマンス」既に定評のある小説なりマンガを映画化する場合、できるだけ原作に忠実に作るか、あるいは大胆な解釈のもとに作るかのいずれかの道を選ぶことになるんだらうが、この2作はどちらも後者の道を選んだものの半端に終わった失敗作。「アホ」は監督までやってしまった松田優作のひとりよがり。「めぞん」は鈴木清順あたりが撮れば良かったのに(でも、伊武雅人と藤田弓子は適役)。/「ベルリン・ルース」西独のクスリ臭いパンク・ミュージカル。音楽を含めて'83年作品とは思えぬアナクロぶりで、猥雑だが非常に明るい。ベルリンという土地柄と登場人物群の魅力が幸いして、低予算でもこれだけ面白い映画が作れたのね。/「未来都市ブラジル」「時計仕掛けのオレンジ」や「プリズナー」の悪夢的な雰囲気は何倍にも増幅したかのような、凄まじいブラック・コメディ。やはりテリー・ギリアムはタダモノではなかった、と納得させる文句なしの傑作。/「バグ」(9月19日法政大学学生会館大ホール 出演: 竹田賢一+小杉武久+川仁宏)「分別盛りのバグたちが音を行為する。何が起るかわからないから、おもしろい」ということでした。何が起るかかわからないというからはまったくなく、不覚にも途中熟睡してしまいました。メロデーへの回帰(?)が気になった。/「コンサート THE BIRDS AND FLOWERS」(9月27日出演: ゼ・ファントムギフト、ロンドンタイムス)ファントムギフトはサイケ&GSを演るムサビ出身バンドだそうですが、ファンになりました。黄色い声上げゴーゴーを踊る親衛隊の皆さんもおかしい。ロンドンタイムスのほうは、達者ではあったが一つも面白くない。なぜかと考えたが、ウイラードとかラフィン・ソーズとかスタークラブとかに通じる若者の健全さが不快だったからみたい。ポプコンでも出てりやいのです。/「王国と覇族一火の鳥」(10月2日 風の旗団 第四次'86旗団行動 七の風)唯一良かったのが劇中劇でちょっと顔を出す「四谷怪談」だったというの、寂しい。/「小杉武久の世界〜再会「タージマール旅行団」」(10月4日 双ギョーリ企画「Sound Installation 70's」の一環)フォークの飛び入りもあってたりして、まったく70年代ではあった。/「公民館運動衫並場所」(10月5日 杉並区立荻窪地区市民センター音楽室)は例によって疲れたぜ。遊びまで時間に追われているというのは精神衛生に良くない。/「四分五裂放送局」(10月13日 下北沢 スペース・ホームラン)今度は自前のFMで続きをやりたくて、機材のノウハウを知ってる人、教えてください。/「荒井真一展」(10月18-19日 ギャラリー・葉)アラシン作品は遠くから見るほうが好きです。縮小してみてもいいかも知れない。僕の嗜好は小さいものや微細なものに偏っているみたいでどーもすいません。

☆前回のP.Eに載ってたワープロによって書かれたO氏によるワープロ批判の文章を読んでの批判を筆者あてに書いたところなんだけど[息継ぎ]。①生理的嫌悪感に強引に理屈をつけようとしている点。②ワープロに必要以上に「脅威」を感じている[言い替えば、「敵」として過大評価している]点なんかは、ワープロ嫌いにも共通しているような気がする。僕はメーカーから金をもらってるわけでもないワープロさんに味方する義理もないが、上記のような不純な動機に基づくワ

ワープロ批判は当を得ていないと思う。それでは③ワープロの需要は「彼等」(資本)がつくったものである。④日本語にワープロは不要だが、ワープロは日本語を必要としたといった指摘はどうか? 日本語が記号としての被-操作性に利する方向に変化してきたことは事実だが[ただし、日本語をデリダ的なエクリチュールとして扱うことは決してできないだろう]、それだけの理由でワープロが急速に普及したとは思えない[和文タイプはもっと普及しても良かったはずである]。また、僕は「彼等」と「我ら」とは先験的に異なる欲望を持つとは思わないし、仮にそれらの欲望を区分できるにせよ、両者が質的にもタイミング的にも一致しない限りは現実には必要は生じえない[エルカセットの失敗を想起。なお、モノの需要は必ずしも有用性には基づかない。昔からそうだったのだが、このことがあまねく認識されるようになったのは最近のことかも知れない]と考えるから、ワープロは「彼等」によって一方的にもたらされたものとは思えないのだ。ワープロは「膠着語としての」日本語を容易に表記したいという、「我ら」があらかじめ共有していた欲望を初めて満たした機械だからこれだけ急速に普及したのだと思う。O氏の文章にはこのほか、⑤ワープロの内部を支配する言語は使用価値しか持たず、また過剰性はエラーとしてしか機能しないから、メタ言語化の契機は無く、成熟した自由度を期待しえない、という批判もあった。これに対しては、「ワープロはもともとそのような用途で作られてはいない。」と応えれば十分かも知れないが、ワープロのソフトの中にも結構面白いバグが住んでいることがあるよ、と指摘しておけば、「敵として物足りない」という場違いな不満も少しは軽減できるだろうか? いずれにせよ、ワープロ[を含むハイ・テクノロジー・メディア一般、と言いたいのかも知れない]の機能的限界と、チャーマンのトランスや非-イデオマティックな即興演奏を対比させて、後者はメディアの拘束力を無化する可能性を持つ=「成熟した自由度」を持つとする論法は、なんだかタメにする二項対立のような気がするのは僕のうがった見方かしら?僕はこの種の二項対立の罫に落ちないためには、相対化の作業が必要だと思う。チャーマンのトランスを例に採れば、それは日常の象徴秩序から逃れる行為であると同時に、別の象徴秩序に移行する行為である。この移行の過程における一時的な無秩序を「せめぎあい」の場、自由度の高い場として評価するのは、チャーマン自身ではない。チャーマンの技術を反-技術として捕らえるのは、彼自身ではない[チャーマン自身は、例えば部族の中の病人にある言葉を授けることによって、彼を共同体に再統合し、病気を治すという機能を持つメディアなのであって、決して無秩序に仕える者ではない]。自由を求めているのは誰か? (続くーかどうか分からない) ☆ なんてグジャグジャ書いてるうちに長くなってしまった(紙を節約するために行間を詰めちゃおう。真っ黒になるぜケケケ)。疲れました。ではまた(適当にカットしていいです)。

19861027

※音なしの人たち。6は11月18日(火)夜6~9:30ですか 前回は参加者が少なかったけど僕も楽しめた。「音なし」は観客の有無は気にせず特別何れ規定することもなく気楽にやってきたけれど少し変えてみようかという気もある。多分来年から、これはP.E.にもいえることがもしれない。

※「この値段に誰か文句は言わせない」とかいうコピーのある、た近頃の安売百貨の店でCDライブラリを18000円で買って来た、という僕もまたほとんど扱いはしらない。覚えよとしない。キカイは苦手。小さい子から男らしくないなどと叫ぶなかな...

今日は酒乱の月だった。

・Y氏結婚パーティー二次会の全盛気味店にあってのゴタゴタからこぼれようか客がからんで来てこちらも酔った勢いで相手になってしまった。その時の感情の起伏というか、異様なエネルギーの磁場というか、今思うと取心しいほどでもあるけれど平凡な日常から突出した部分だったので面白かったなという感じもある。けがもなかったのにそんな風に言えるのかも知れないが。

・荒井真一 個展の初日、画廊と酒場でついつい飲み過ぎ。その店を出て地下鉄の駅を昇ったところまで覚えているが、それからどうやって下北沢に行ったのかもわからない。気がついたらもうオホムラヤのマンションの前について近くの店で酒と弁当を買って《四分五裂》放送局に入る。G.F.S.O.君にビデオテープを返し鈴木君と少し話したがまた記憶がうすれてきていつのまにか外に出て断片的な記憶ながらなんとか帰宅できた。昔から酔っ払うとよく記憶ソープになる。どうやって家に帰ったのかもわからないことが多い。花いことた。たこえ殺されたとしても覚えてないだろう。

・他にも深酒する機会が多くてすかしの4日肉禁酒したのは特筆。  
・今日見た映画は「エル・トホ」、15年位前脚本だけ読んで見たいと思っていた。ゴッゴエルと臭いの子前衛的西部劇。最近の映画にくらべれば充分に刺激的だがその前衛的かつよとちくさい。それよりも終映後、出口近くで2年くらい会ってなかったT君と顔を含めたことろ方角はくっきり彼は意図的に人と会わないようにしていたらしいので「恥づかしくして顔を見せようしなくする」。